パスカル・ゴダールピアノリサイタル

1部

バラード 第1番 Op.23……ショパン
ファンタジー Op.49……ショパン
スケルツォ 第1番 Op.20 ……ショパン
幻想ポロネーズ Op.61 ……ショパン
スケルツォ 第2番 Op.31 ……ショパン

2部

鏡……ラヴェル
蛾
悲しき鳥たち
海原の小舟
道化師の朝の歌
鐘の谷
ラ・ヴァルス……ラヴェル

秋

2001 四季のコンサート

2001年10月10日(水) 6:45PM
会場：浜松市教育文化会館
主催：浜松音楽友の会

プロフィール

1971年生まれ。R.アントルモンのもとで学んだ後、パリ国立音楽院にてイヴォンヌ・ロリオ・メシアンに師事。ピアノ科、伴奏科のそれぞれで第1位を得る。その後E.ヴァルヴァローヴァ、V.サハロフに学んだ後、ドイツ・ハノーファー音楽大学にてウラジミール・クライネフに師事。

1990年ボルト・コンクールにて第1位、1993年ミラノのディノ・チアーニ・コンクールにて第2位、クリーブランド、東京国際コンクールにおいても入賞。 ヨーロッパ及び日本の多くのオーケストラに招待され、パリのサル・プレイエル、モスクワのチャイコフスキーホールとボリショイホール、サンクトペテルブルグのフィルハーモニーホール、ミラノのスカラ座などで共演。また、ラジオ・フランスのモンペリエやベルン、横浜等の多くの国際音楽祭にも定期的に招待されている。 1996年3月、マリア・カラス・コンクールにてグランプリを獲得し、この偉大な歌手の没後 20年を記念したコンサートに招かれ、アテネの古代劇場にてリサイタルを行った。1999年から2000年にかけては、フランス国立ロワール管弦楽団、ストラスブールフィルハーモニックオーケストラ、サル・プレイエル交響楽団等、多くのオーケストラと共演し好評を博す。現在、ヨーロッパで最も期待されている若手ピアニスト。

パスカル・ゴダール
ピアノリサイタル

PASCAL GODART
PIANO RECITAL

曲目解説　　宮本賢二朗

●ショパン／バラード　第１番　ト短調　Op.23

ショパンの4曲のバラードの中でも最も親しまれている曲。バラードとはソナタやロンドなどに属さない自由な形式による曲だが、「バラード（物語）」という言葉が意味する通り、物語のように旋律が自然に広がっていく。ゆっくりと物思いに耽るような導入部のあと、憂いに満ちたワルツのメロディが現れる。そしてこのメロディが長調に変形されて現れると、非常に繊細な、春の夜のそよ風のような雰囲気が創られる。やがておもむろに現れる第二主題のメロディは再会の喜びを表すかのようだ。まるで美しい映画を見ているような音楽的情景に満ちた作品。

●ショパン／ファンタジー　ヘ短調　Op.49

ショパンのピアノ曲の中でも傑作といわれる作品。1842年、ショパンは彼の理解者であった男装の麗人ジョルジュ・サンドと深い愛情で結ばれていた。そのサンドの領地ノアーンで書かれたこの曲は、希望に満ちた力強さと変化に富んだ豊かな楽想に溢れている。バラードといっても差し支えない作品だが、異なったテンポ、楽想、大胆な転調の中で、幻惑的な和声の流れが保たれており、全体として「ファンタジー（幻想曲）」と呼ばれるにふさわしい作品となっている。

●ショパン／スケルツォ　第１番　ロ短調　Op.20

1831年、弱冠21歳であったショパンは革命に揺れる故国ポーランドからウィーンに逃れていた。しかし新天地でも成功は得られず、この曲はその追い込まれ絶望的な精神状態の中で作曲された。元々スケルツォとはベートーヴェンが使い出した、おどけた感じを強調する3拍子の「諧謔曲」だが、この曲は前述の背景を反映してか、悲壮感が前面に出ている。中間部トリオのメロディはポーランドの古い聖歌「幼子イエス」に基づいており、ここにもショパンの祖国への思いが表れているといってよいだろう。
晩年の作品に見られる幻惑的な和声や、メロディの魅力には欠けるものの、ショパンの音楽の根底にある諦観の感じられる興味深い作品。

●ショパン／幻想ポロネーズ　変イ長調　Op.61

ショパンはポーランド舞曲の特徴を持ったポロネーズを数多く作曲し、ポロネーズを芸術の域にまで高めた。生涯で１６曲書かれたポロネーズの中で、第7番「幻想」はショパンの晩年に書かれた最高傑作の一つといわれている。ため息のような和音から始まり、静かな導入部を経て、やがてポロネーズのリズムにのったメロディに受け継がれていく。若い頃の作品と異なり、このポロネーズは遠い過去の情熱を懐かしむかのような落ち着きを備えている。曲の後半から技巧的な盛りあがりを見せ華やかに終盤を迎えるが、その中にも一抹の悲哀が漂う、晩年のショパンらしい作品となっている。

●ショパン／スケルツォ　第２番　変ロ短調　Op.31

ショパンの４曲のスケルツォの中でも最も多く演奏される作品。第1番に比べると、力強さと自信に溢れている。序奏は不穏な雰囲気で始まり、それに続く衝撃的な和音の響き、中間部の高音から崩れ落ちていくようなメロディと揺れるような半音階の進行など、強弱、リズムの対比、メロディラインの対比とショパンにしては珍しいコントラストに満ちた構成はベートーヴェンを思わせ、一貫した緊張感を生んでいる。ベートーヴェンのスケルツォの伝統を受け継いだ作品といえる。

●ラヴェル／鏡

「水の戯れ」で印象主義の作風を推し進めたラヴェルは、具体的な対象を更に前衛的な和声、響きで描写することをこの作品で試みている。タイトル「鏡」は様々なイメージを音楽で鏡のように映し出すという意味が込められているといってよい。
第１曲「**蛾**」は夜に飛び交う蛾の不安定で幻想的な飛翔が見事に表現されている。第２曲「**悲しき鳥たち**」はラヴェルいわく：夏の最も暑い時期に暗い森で堪えしのぶ鳥たちの姿。第３曲「**海原の小舟**」は波にもまれて浮かぶ小舟の姿。第４曲「**道化師の朝の歌**」は管弦楽にも編曲され、ポピュラーな曲だが、スペイン・ヴァスク地方の民謡の様式で道化師のおどける様子、悲しむ様子を表現している。第５曲「**鐘の谷**」は谷間に響く教会の鐘と牧歌的な情景を表した音楽。

●ラヴェル／ラ・ヴァルス

原曲はディアギレフの依頼により、ロシア・国立バレエ団のために作曲された。ゆっくりとした低音の響きで始まり、次第に高揚していくこの曲について、作曲家自身語っている：「雲の合間から、ワルツを踊る人々が垣間見える。雲は次第に晴れてゆき、回りながら踊る大勢の人々で溢れる大広間がはっきり見えてくる。社交場は明るさを増し、シャンデリアの光が輝く。1855年ごろの宮廷である。」管弦楽の原曲ではラヴェルの天才ぶりが如何なく発揮されているが、ピアノ曲でも色彩感溢れる作品となっており、演奏者のテクニックが随所に要求される曲である。